

# ファウンティンズ修道院



Photograph © Kippa Matthews



**新しい修道院の出発** 1132年ヨークの聖マリア修道院の内輪もめを発端に13人のベネディクト会の修道僧がヨークのサーストン枢機卿に保護されました。枢機卿は修道僧たちにスケル川の渓谷にある土地を提供、彼らは1132年12月27日にこの地に初めて足を踏み入れました。

ここは豊かで、平和な土地でした。また厳しい自然からも守られていました。建築用の木材や石材も豊富で、水は川から自由に補給でき、上の土手の周辺にはいくつもの泉が湧き出ていました。この修道院の「ファウンティンズの聖マリア (St Mary of Fountains)」という呼び名は、これらの泉 (ファウンティン) がその由来だという説と、サンベルナル・デ・フォンテーヌ (St Bernard de Fontaines) の名前から取ったという二つの説があります。サンベルナル・デ・フォンテーヌは1115年から1153年にかけてフランスのクレールポーでシトー修道院長を務めました。1135年に、彼はフォンティンズの修道僧たちにシトー派に加わるよう勧めました。シトー修道会はこの新しい修道院のスタートを助け、野心的な建築計画を立てました。



**ホワイト・モンク (白い修道僧)** シトー会の修道僧たちは厳しい生活を自らに課しました。彼らは染めていない白い羊毛製の礼服を纏っていたため「白い修道僧 (White Monks)」と呼ばれるようになりました。下着も禁止されていましたが、長旅にはズボン下の着用が許可されました。この「歌う」修道僧たちは読み書きができました。修道会に入った僧たちは祈りと瞑想の生活に全てを注ぎました。

彼らはほとんどの時間沈黙を守り、互いの意思の疎通には手話を使っていました。彼らは毎日8回行なわれる礼拝で神を讃える歌を歌います。パンと野菜を中心とした質素な食生活を守り、飲み物は薄目の



身廊

## 修道院の繁栄

修道院は裕福な家から、彼らの魂の救済のための祈りと交換に現金や土地を受け取るようになりました。土地が増えたことで、修道僧たちの肉体労働の量も増え、これまでの祈りを中心とした生活を継続することが難しくなってきました。



平修士 彼らは農地や農場で働く修道僧です。彼らも修道院に入った僧ですが、白い礼服ではなく茶色の礼服を纏っていました。平修士たちは修道院の日常的な作業を担当し、その分、礼拝に参加する回数は限られていました。



彼らは厳しい肉体労働に携わっていたため、他の僧よりも就寝時間が長く、より多くの食べ物を摂ることができました。これらの平修士の存在なしには、フォンティンズ修道院の繁栄はなかったと言えます。多くの平修士が修道院の石工、なめし革職人、靴屋、鍛冶屋として働いていましたが、彼らの主な仕事は修道院が保有していた膨大な数の羊の世話でした。羊たちは西は湖水地方、北はティーズサイドに広がる農場に放牧されていました。羊毛は修道院にとって主要な収入源でした。修道院はまた、鉛や鉄の採掘、採石、馬の飼育などにも携わっていました。

困難な時代 しかし1400年頃になると、修道院の土地は必要以上に膨れ上がり、管理に手が回らない状態になっていました。



チャプターハウス

14世紀に入ると飢饉や羊の疫病、腹をすかせたスコットランド人の襲撃、ペスト（黒死病）が修道院を襲いました。ペストで多くの人が死んだため、平修士として働ける男子がいなくなり、修道院は所有していた農場を賃貸せざるを得なくなりました。修道僧たちは賃貸料として現金や農産物を受け取りました。15世紀後半になると牧羊にかわって酪農が発展しました。



当時の修道院はこのような形をしていたと想像されま

最後の年 修道院長は非常に強い権力を持っていました。1495年から1526年にかけて修道院長を務めたマーマデューク・ハビーは周囲を圧倒する塔を建設しました。しかし1530年代になると、ヘンリー8世が教会の影響と独立を煙たがるようになりました。彼はまた教会の富を狙っていました。議会で法律を通過させ、ヘンリー8世はすべての修道院と女子修道院を閉鎖しました。これは英国史では「修道院の解体」と呼ばれています。最大、そして最も裕福な修道院として、フォンティンズ修道院が閉鎖されたのは最後のころの1539年でした。修道院長は当時としては大金だった年間100ポンドの年金を受け取り、小修道院長は年間8ポンド、他の30人の修道僧は5ポンドでした。屋根に使われていた鉛は武器を生産に流用されました。ステンドグラスも取り外され、その一部はリボン聖堂とヨーク大聖堂に再利用されました。修道院は、1540年に売却されました。